

12月の定例研究会では、内海孝先生からご講話をいただきました。

「原合名会社ニューヨーク支店 ——ニューヨーク市場の全体性のなかで——」

原善三郎がはじめた原商店は横浜で生糸売込を営んでいました。善三郎の没後直後、原富太郎が原合名会社に改組しました。1899（明治32）年のことです。

原合名会社は1900年にインド系の商社タタを代理店としてニューヨークに進出し、1917年にはニューヨークで支店を構えました。初代支店長は藤田鉦之助、場所は四番街というニューヨークの中心部でした。

この時期、原合名会社はリヨンとモスクワにも支店を持っていました。特にモスクワには日本の商会では早く進出しており、特筆に値します。

1940（昭和15）年には富太郎の孫に当たる西郷健一郎が業務視察のためにニューヨークを訪れます。1939年に日米通商条約廃棄通告があり、日米の開戦が危ぶまれていたからです。

質疑応答では、富太郎が外国貿易を「男性的決心の事業」と語っていたこと（『原三溪翁伝』64ページ）に関して、生糸貿易という不安定要素の高い事業を、いかに危険を分散しながら手がけたかなどが話題にのぼりました。



内海孝先生
アメリカの雑誌記事や貿易統計などの資料を示しながらお話をいただきました。



生後4ヶ月から84歳まで幅広い顔ぶれが揃いました

その他

原三溪・柳津文化の里構想実行委員会で活躍する市川さんと尾関さんから、岐阜での活動について報告がありました。児童が柳津の風景を描く「原三溪翁顕彰美術展」、小学校6年生の道徳の授業で市川さんが原三溪の話をしたこと、そして11月4日に開催された「原三溪顕彰茶会と講演会」など、多方面に行事が展開されているとのことでした。